■無意味な筆順指導

書き方の指導は、教師が「漢字は書けなくても好いのだ」と悟れば、あとはうまく行くものです。筆順にしてもさうです。

そもそも筆順とは、文字を書くのに、最も素直に書ける「書き方の順序」のことです。その基本は、「上から下に向って書く」「左から右に向って書く」（左効きはこの反対）の二つです。

この事は、子供たちに口で教へるよりも、「上から下へ」「下から上へ」「左から右へ」「右から左へ」といふやうに交互に繰返して書かせることに依り、その際の運筆感覚を子供自身の体験に訴へて、子供に判断させることです。

かうして、「上から下へ」「左から右へ」といふ運筆が書き易いといふ事を子供が自得できたら、個々の漢字の筆順については、一字一字教へてやらなくても、子供たちに考へさせれば大抵出来るものです。

私は、個々の漢字について筆順を教へたことは有りません。子供に考へさせました。文字に依っては、子供に考へさせた上でこれを発表させました。大抵正しく書きます。誤ってゐた場合でも、再考させますときっと正しい筆順を書きます。

筆順は、教師が「この字はかういふ順序に書かなければいけない」と言って教へるから却（かえっ）て難しく感じられ、不愉快なものになるのです。そもそも子供の頭で解決できるものは教へてやるべきではありません。子供が頭を使はなくなる恐れがあります。

文部省の『筆順指導の手引』の“まえがき”に「筆順には、正しい筆順も無く、誤った筆順も無い」とあります。筆順はさういふ性格のものですから、「かういふ順序で書きなさい」と言って強制すべきものではありません。

そもそも筆順の手引きは、教師の要請で、文部省が心ならずも編集し刊行したものだと聞いてゐます。言はば「教師がとんでもない書き方をしないやうに」教師の為に制作されたものです。だから、“まえがき”に、「いく通りもの筆順があるものでも、ここにはただ一つしか示してゐない」と書かれてゐます。

所が、何でも金科玉条（きんかぎょくじょう）にしたがる教師が、いく通りもの筆順がある漢字を、手引きに示された筆順だけを強制するばかりか、他の筆順を誤りとするものですから、文部省でもたまりかねて度々さういふ事の無いやうにといふ指示を出してゐます。

それでも一向に改まる様子が無いので、文部省も手引きを廃刊してしまひました。然し、廃刊された今でも、各学校にはこの本が残ってゐますので、相変ず子供たちを苦しめ、またその親までも苦しめてゐま

す。

「親までも苦しめてゐる」といふわけは、例へば、子供が親に「上といふ字の筆順を教へて」と尋ねますと、親は大抵自分が書いてゐる「‐｜一」といふ筆順を教へるでせう。所が、手引きの筆順は「｜‐一」となってゐますから、子供は学校で×（ばつ）を貰って親を恨む、といふ事になるからです。

これは大変に困った事です。昔から、このやうな教育の大半は家庭で行はれてゐました。だから、これが出来なくなった今、学力低下が叫ばれるのは当然の事だと言へませう。

「‐｜一」といふ筆順は、昔から行はれてゐる極めて常識的な筆順です。だから、手引きでも“まえがき”にこの筆順などを例に挙げて、「手引きに示されてゐないこのやうな筆頭をも認めなければいけない」と断り書きしてゐるのです。

といふ事は、現在、大抵の学校で行はれてゐる「手引きに示されてゐる筆順だけが正しいとする筆順指導は、手引きに違反した指導である」といふ事になります。だから、漢字の筆順テストをする事など言語道断の行為だと言ふべきです。